

ツォンカパ著
『タントラ王吉祥秘密集会秘伝・五次第を
明らかにする灯』より「楽空無差別という
空と悲の意味を説明する」章・和訳

吉水千鶴子

I 序

『秘密集会タントラ』(*Guhyasamājatantra*) 聖者流の重要典籍『五次第』(*Pañcakrama*, ナーガールジュナ著) についてのツォンカパの註釈『五次第を明らかにする灯』(*Rim lnga rab tu gsal ba'i sgron me*) より、一部をここに訳出する。この書はツォンカパのタントラ仏教理解を知る為には見逃せない重要な教示を含んでおり、私も拙論中で何度か言及してきたが、今回、山口瑞鳳先生のお勧めもあり、訳として提出することとした。また、この書の全体像を知っていただくために、科文表を付した。それを見ていただければわかるように、この書は『五次第』の逐語訳ではなく、無上瑜伽タントラの究竟次第である五次第の修道を体系的に説明したものである。しかしながらツォンカパは、実際の五次第の実践の解説に入る前に、その前段階としてのイントロダクションとも言うべき導入部分にかなりの言葉を費やしている。つまり、F3³~D3³ (その間の科文は省略した) が実際の五次第の説明であるのに対し、A1~A5は無上瑜伽タントラ中における『秘密集会』の位置付け、聖者流の系譜と典籍の概説、A6中、F3³ までは、生起次第を含めた二次第の概要と究竟次第修習の思想的基盤、修習方法の基本が語られるのである。ここに我々は、ツォンカパ独自の無上瑜伽タントラ解釈とその問題点を見ることが出来る。

その重要性を、山口瑞鳳先生は久しい以前より指摘されて来られたのであるが、ここに機会を得ながら、紙数、時間等の都合で一部しか訳出できなかったことは残念である。

究竟次第の肝要はEVAMという二字に集約される。その了義は空と悲の無差別である。それにまた「楽空無差別」と「二諦無差別」の二義がある。ここではその「楽空無差別」の解釈について訳出した。これは極めてタントラ的概念である。そして不可解な概念である。これについて、またツォンカパの解釈について、追及すべきことは多くあるが、詳しい検討は近い機会に譲り（1988年度日本西藏学会）、拙い訳で恐縮ではあるが、まづツォンカパの言葉に耳を傾けていただきたい。

TABLE

	(bkra shis lhun po ed.) (Peking ed.)	
Salutation and Prologue	1b~3b ²	1b~2b ⁸
A1. rGyud gnyis kyi rnam par bzhag pa	3a ³ ~21b ⁶	3a ¹ ~18a ⁵
B1. Bla med kyi rgyud la mtshan pa'i rgyud dbye ba byung tshul	3a ³ ~3b ²	3a ² ~ ⁸
B2. mTshan don dang mthun pa'i rgyud gnyis kyi dbye ba bstan pa	3b ² ~14b ¹	3a ⁸ ~12a ²
C1. Dogs pa'i gnas bgod pa	3b ³ ~4a ¹	3a ⁸ ~3b ⁴
C2. De la so so'i 'dod pa bshad pa	4a ¹ ~14b ¹	3b ⁴ ~12a ²
D1. gZhan gyi lugs	4a ¹ ~5a ⁴	3b ⁵ ~4b ³
D2. Rang gyi lugs	5a ⁴ ~14b ¹	4b ³ ~12a ²
E1. Thabs shes gnyis su med pa'i rgyud kyi 'jug tshul	5a ⁵ ~7b ²	4b ⁴ ~6a ⁸
F1. dNgos kyi don	5a ⁵ ~6a ⁶	4b ⁴ ~5b ¹
F2. Dogs pa bsal ba	6a ⁶ ~7b ²	5b ¹ ~6a ⁸
E2. Thabs shes so so ba'i rgyud kyi don bstan pa	7b ² ~14b ¹	6a ⁸ ~12a ²
F1 ¹ . Dri med 'od la sogs pa las gsungs pa	7b ² ~9a ³	6a ⁸ ~7b ⁵
F2 ¹ . rDo rje gur la sogs pa las gsungs pa	9a ⁴ ~14b ¹	7b ⁶ ~12a ²
G1. gZhan gyis brtags pa'i mtha' dgag pa	9a ⁴ ~12b ⁴	7b ⁶ ~10b ³
H1. gZhan gyi lugs	9a ⁴ ~10a ¹	7b ⁶ ~8a ⁸
H2. De dgag pa	10a ¹ ~12b ⁴	8a ⁸ ~10b ³
G2. Legs par gnas pa'i phyogs bzhag pa	12b ⁴ ~14b ¹	10b ³ ~12a ²
B3. Thabs kyi rgyud bye brag tu bshad pa	14b ¹ ~21b ⁶	12a ² ~18a ⁵

C1 ¹ . Thabs rgyud la gsum du dbye ba	14b ¹ ~15a ⁵	12a ³ ~12b ⁶
C2 ¹ . gSang 'dus bye brag tu bshad pa	15a ⁵ ~21b ⁶	12b ⁶ ~18a ⁵
D1 ¹ . rTsa rgyud dang rgyud phyi ma'i don dang bshad rgyud kyi grangs bstan pa	15a ⁵ ~17b ²	12b ⁷ ~14b ³
D2 ¹ . bShad pa'i rgyud kyis ji ltar bshad pa'i tshul bshad pa	17b ² ~21b ⁶	14b ³ ~18a ⁵
E1 ¹ . rGyud phyi ma dang dgongs pa lung ston gyis ji ltar bshad pa	17b ² ~18b ⁵	14b ⁴ ~15b ⁴
E2 ¹ . rDo rje 'phreng ba la sogs pa gsum gyis ji ltar bshad pa	18b ⁵ ~21b ⁶	15b ⁴ ~18a ⁵
A2. 'Dus pa'i che ba brjod pa	21b ⁶ ~24a ¹	18a ⁵ ~19b ⁸
A3. De'i dgongs pa 'grel pa'i rim pa	24a ¹ ~26b ³	19b ⁸ ~22a ¹
A4. 'Phags skor gyi gzhang gi grangs	26b ³ ~33b ⁵	22a ¹ ~27b ⁶
B1 ¹ . 'Phags pa yab sras gnyis kyis gzhang ji ltar mdzad pa	26b ⁴ ~29a ⁶	22a ² ~24a ³
B2 ¹ . Sras lhag ma gsum gyis gzhang ji ltar mdzad pa	29a ⁶ ~31b ⁵	24a ³ ~26a ³
B3 ¹ . De dag di rjes 'brang rnam kyis gzhang ji ltar mdzad pa	31b ⁵ ~33b ⁵	26a ³ ~27b ⁶
A5. De'i man ngag bod du brgyud tshul	33b ⁵ ~34b ⁵	27b ⁶ ~28b ³
A6. gDams pa rin po che dngos kyi don	34b ⁵ ~342b ⁶	28b ³ ~287b ¹
B1 ² . Theg pa chen po gnyis thun mong ngam lam spyi la bslab tshul	34b ⁶ ~38b ¹	28b ³ ~31b ³
B2 ² . Thun mong ma yin pa'am bye brag pa 'dus pa'i lam la bslab tshul	38b ¹ ~342b ⁶	31b ⁴ ~287b ¹
C1 ¹ . Rim gnyis kyi lam gyi snod rung du bya ba	38b ³ ~ ⁵	31b ⁴ ~ ⁷
C2 ¹ . sNod du gyur nas dam tshig dang sdom pa dag par bya ba	38b ⁵ ~39a ³	31b ⁷ ~32a ³
C3 ¹ . Dam tshig dang sdom pa dag nas lam ji ltar bsgom pa	39a ³ ~340b ³	32a ³ ~286a ²
D1 ² . Rim gnyis kyi go rim nges pa	39a ⁴ ~41b ³	32a ⁴ ~34a ²
D2 ² . Go rim can gyi rim gnyis bsgom tshul	41b ³ ~307b ⁴	34a ² ~258b ²
E1 ² . bsKyed rim sgom tshul	41b ³ ~44a ³	34a ³ ~36a ¹
F1 ² . bsKyed rim ji tsam zhig sgom dgos pa	41b ⁴ ~43a ¹	34a ³ ~35a ³
F2 ² . Rim pa ji ltar slob pa	43a ¹ ~44a ³	35a ³ ~36a ¹
E2 ² . rDzogs rim sgom tshul	44a ³ ~307b ⁴	36a ¹ ~258b ²
F1 ³ . sPyir rdzogs rim gyi gtso bo e vam gnyis kyi don mdor bstan pa	44a ⁴ ~46b ⁴	36a ² ~38a ²
F2 ³ . E vam gnyis kyi don rgyas par bshad pa	46b ⁴ ~74b ³	38a ² ~59b ⁷

GP. E vam gnyis kyi nges don rgyas par bshad pa	46b ⁴ ~66b ¹	38a ³ ~53a ⁷
H1 ¹ . bDe stong dbyer med kyi stong pa dang snying rje'i don bshad pa	46b ⁴ ~59b ²	38a ⁴ ~48a ²
I1. sTong pa'i don bshad pa	47a ⁶ ~52a ⁵	38b ¹ ~42b ¹
J1. 'Khor ba'i rtsa ba ngos gzung ba	47a ⁶ ~48a ³	38b ¹ ~39a ⁴
J2. De 'gog pa 'i bdag med kyi lta ba bstan pa	48a ³ ~48b ¹	39a ⁴ ~40a ⁶
J3. Mi 'dra bar 'dod pa dgag pa	48b ¹ ~52a ⁵	40a ⁶ ~42b ¹
I2. bDe ba'i don bshad pa	52a ⁵ ~55a ²	42b ¹ ~44b ²
I3. bDe stong dbyer med du sbyor ba'i tshul bshad pa	55a ² ~59b ²	44b ² ~48a ²
J1 ¹ . dNgos kyi don	55a ² ~56b ⁴	44b ³ ~45b ⁷
J2 ¹ . De la rtsod pa spang ba	56b ⁴ ~59b ²	45b ⁷ ~48a ²
H2 ¹ . bDen gnyis dbyer med kyi stong pa dang snying rje'i don bshad pa	59b ³ ~66b ¹	48a ² ~53a ⁷
I1 ¹ . dNgos kyi don	59b ³ ~61b ⁵	48a ² ~49b ³
I2 ¹ . De litar bshad dgos pa'i rgyu mtshan	61b ⁵ ~66b ¹	49b ³ ~53a ⁷
J1 ² . gZugs sku'i rgyu thun mong ma yin pa'i sgo nas bsgrub pa	62a ¹ ~63b ⁵	49b ⁶ ~51a ⁵
J2 ² . sByang gzhi'i gnad thun mong ma yin pa'i sgo nas bsgrub pa	63b ⁵ ~64a ⁴	51a ⁵ ~51b ³
J3 ² . lHa skyed tshul gyi gnad la brten te bsgrub pa	64a ⁵ ~64b ⁴	51b ³ ~52a ¹
J4 ² . Thabs shes ngo bo dbyer med kyi gnad la brten nas bsgrub pa	64b ⁴ ~66b ¹	52a ¹ ~53a ⁷
G2. Lus la gnad du bsnon dgos pa	66b ¹ ~74b ⁴	53a ⁷ ~59b ⁷
H1 ² . bDe stong dbyer med kyi lhan skyes skyed pa la lus la gnad du bsnun dgos lugs	66b ¹ ~70b ¹	53a ⁸ ~56b ¹
I1 ² . Thabs gnyis spyir bstan pa	66b ³ ~67b ⁴	53b ¹ ~54a ⁷
I2 ² . So sor bshad pa	67b ⁵ ~70b ¹	54a ⁷ ~56b ¹
J1 ³ . Rig ma'i phyag rgya	67b ⁵ ~68b ¹	54a ⁷ ~54b ⁸
J2 ³ . Nang gi rtsa rlung sogs sgom pa'i thabs	68b ¹ ~70b ¹	54b ⁸ ~56b ¹
H2 ² . bDen gnyis dbyer med kyi zung 'jug skyed pa la lus la gnad du bsnun dgos lugs	70b ¹ ~74b ³	56b ¹ ~59b ⁷
I1 ³ . rDzogs rim gyi lam rnam skye shi bar do'i rim pa bzhin du skyed dgos pa	70b ² ~73b ¹	56b ² ~58b ⁸

I2 ³ . De la brten nas lus la gnad du bsnun lugs bshad pa	73b ¹ ~74b ³	58b ⁸ ~59b ⁷
F3 ³ . Bye brag tu rgyud di'i rdzogs rim bshad pa	74b ³ ~307b ⁴	59b ⁷ ~258b ²
⋮		
D3 ² . Rim gnyis la bogs 'byin pa'i thabs spyod pa	307b ⁴ ~340b ³	258b ² ~286a ²
C4 ¹ . bsGoms pa'i mthar 'bras bu ji litar 'thob pa'i tshul	340b ⁴ ~342b ⁶	286a ² ~287b ¹
Prayer and Colophon	342b ⁶ ~344b ⁴	287b ¹ ~290a ⁸

II <訳>

*テキストはタシルンポ版を使用し、北京版を参照した。

The Collected Works of Tsong kha pa, Part II, New Delhi, 1978

P.No. 6167, Vol.158

ツォンカパ著『タントラ王吉祥秘密集会秘伝・五次第を明らかにする灯』
よりE2². 究竟次第の修習方法E1³. 一般に究竟次第の心髄である EVAM という二〔梵字〕の意味を
簡略に説示する一般に無上瑜伽タントラの真意のすべての要点は、EVAM 等の40の梵
字〔によって表わされる〕教説の起こりを語る言葉(gleng gzhi, nidāna)
の意味に集約され、その意味の心髄はさらに最初の二文字の意味に集まる
のである。これについて『金剛鬘タントラ』(VMT.)では、「タントラにおいて最初に語られる“かくの如く私〔によって聞かれた〕”
(evam mayā śrutam) 云々とはどのようなものであるのか。“かくの
如く”等の最初の言葉の意味は詳しくはどのようにならうか。」¹⁾と最初の二句(rkang pa, pāda)によって、『秘密集会』(GST.)等の
タントラにおいて冒頭に語られている(44b¹)教説の起こりを語る言葉の
意味は〔即ち〕EVAM という二文字の意味となるというあり方〔を問い〕、
後半の二〔句〕によって、EVAM 等のそれぞれ〔の文字〕の意味を詳し

く説明するならばどのようなになるのか、[と問う。その] 2つの問いのうち、
 後者の答えとして、各文字を各偈によって説明し、第一の[問いの]²⁾ 答え
 として **EVAM** の3通りの意味をお説きになるのである。即ち、獲得せ
 らるべき果たる **EVAM** と、[その果を] 得さしめる道たる **EVAM** と、
 それを導く印 (rtags) たる **EVAM** である。³⁾

第一の**E**の意味は、[聖典の] 説教者がある場所にお坐りになって法を
 お説きになるその依所であり、あるタントラでは秘密処、[別の] あるも
 のでは虚空界、また同様に女性器官 (bhaga)、法源、蓮華、獅子座とも
 説かれているものである。**VAM** の意味は、説教者について金剛持、金剛
 薩埵、金剛怖畏 (Vajrabhairava)、金剛自在、へールカ、時輪、原初
 仏 (Ādibuddha) 等の御名前によってそれぞれのタントラに説かれてい
 るものである。即ち、[VMT.に]

「**E** [即ち] 秘密処、虚空界、女性器官、法源、蓮華に、[或いはまた]
 瑜伽獅子座にお坐りになり、最も稀有なるお教えを説かれるお方は、
VAM [即ち]、金剛薩埵、金剛、金剛怖畏、自在主、へールカ、時輪、
 原初仏等の御名前をもつ」という。⁴⁾

これについてまた、秘密処 (45a¹) 等の了義は空性であり、金剛薩埵等
 の了義は大悲であるので、空と悲の無差別を [EVAM によって] 示して
 いるのである。即ち [VMT.に]、

「**EVAM** とは如来の印、無二の標識であり、無差別なる空性と悲であ
 る。真実が明らかに語られるところには如来の印がある。無二の智慧
 (gnyis med ye shes, advayajñāna) を表わすものが、一切タント
 ラの教説の起こりを語る言葉として [必ず] 説かれる⁵⁾」
 というのである。

第二番目の **E** の意味は、般若 (智慧) たる空性であり、**VAM** の意味
 は方便たる大悲という2つである。そして滴 (thig le, bindu) の意味は、
 方便と般若というその2つが無差別に結合することであり、それこそが八

万四千の法門に充溢する心義の真髓を凝縮した法の大王という印を押すと
 ころの印契 (phyag rgya, mudrā) だと説かれている。即ち **VMT.** に
 よれば、

「**E** とは空性であると説かれる。同様に**VAM** とは悲であり、⁶⁾ 滴とはそ
 の2つの結合から生じ、その結合の最も稀有なるものである。[それ
 は] 八万四千の法門に充溢し、[その法門を] 凝縮した印契⁷⁾ である。[こ
 の] 大王の印契こそが諸タントラの冒頭に語られるのである」
 というのである。

このようなこの無二の智慧が語られるタントラには最高の真実が存する。
 が、それがもし説かれなければ、[そこに真実は] 無いのである。(45b¹) 即
 ち [VMT.に]、

「一切タントラの要約された真意とは、不可分なる空性と悲である。真
 実が明らかに語られるところには、如来の印である**EVAM** といわれる
 二文字がある。この二文字が無いところに真実は無い⁷⁾」
 と仰るのである。『秘密成就』(GS.) よりまた、

「タントラの冒頭にあるのは[教えの] 精髓中の最高の精髓である。そ
 れこそが大楽の守護者によって秘密真実と説かれた。すべての仏、菩薩、
 有情の楽の源であり、秘密の考察をなすタントラの王たる『吉祥秘密集会』
 に住する清浄なる **EVAM** の文字に、三界のすべてが恭敬し、礼拝する⁸⁾」
 といい、また

「虚空界といわれるこれは、胡麻の殻の如く見られ、ガンジス川の砂の
 教程の如来たちによって満たされている。この文字の真実に依拠した方
 便のみによって仏、菩薩、有情たちは無上の位を得るであろう⁹⁾」

と二文字の真意こそは正等覚の道の精髓、と讃えられるのである。それ
 故同書に、

「ここで二文字がタントラの冒頭に無いとは認められない⁹⁾」
 とすべての無上瑜伽タントラの冒頭の、教説の起こりを語る言葉 [を述

べる] 段階で、二文字が必ずある、と仰言っているのは、たとえ **EVAM** という (46a¹) 文字が実際には無くとも、その了義は存在しているはずである、ということをご意図なさっているのである。

第3の **E** の意味は、母の女性器官なる支えるものであり、**VAM** の意味は、それに支えられる父の金剛 (男性器官) であり、支えられるものである金剛に存する^{ビンドワ}滴は、様々な化作を示す金剛薩埵にして、大楽等のあらゆる楽の元である。即ち [VMT. に],

「Eとは女性器官の表象であり、蓮華なる支えるものと知るべきである。支えられるものは金剛と説かれる。支えられるものである、金剛持の、そこに住する^{ビンドワ}滴の形は、様々な化作を示す、一切楽の元の住みか、金剛薩埵の大楽である¹¹⁾」という。

これによってつまり、父母の印 (rtags) である **E VAM** 2つの結合より道の **EVAM** を導く方便が示されるのである。

また、内なる自らの身体的重要部位に当てること (nang gi rang gi lus la gnad du bsnun pa) から道の **EVAM** を導く方便である、身体的重要部位の印 (rtags) という **EVAM** が『サムブタ』(ST.) に説かれている。即ち、

「頭頂^{ツテ}と臍における種字の輪は **E** 字 [の形] に正しくとどまり、心臓と首に正しくとどまる [輪] は **VAM** 字に似ていると認められる¹²⁾」

と頭頂と臍の脈管の形は **E** [字] の三角形であり、心臓と首の脈管の形は **VAM** 字の丸い形であることが **EVAM** の意味として説明されている。ここで印 (rtags) というのは形を (46b¹) 表わすものという [意味の] 印である。

このように果の **EVAM** を正しく知った後に、それを得ようと望むときには、その方便である道の **EVAM** という2つの結合の仕方を2つのタントラ (父母両タントラ) から説明されている通りに正しく知り、それを導く方便である外的な印 (rtags) たる **EVAM** [として] 印契^{アドラー} (明妃) と等

しく結合することと、内的な印である **EVAM** を脈管の要所に当てる方法に精通してから、この道を導く方便を実践するのである。そこに両タントラの要点のすべてが集まるので、二文字の意味とその付随的な方法について、あらゆるタントラの進み方を正しく知るならば、二文字の意味が肝要なる真意であると諸タントラで何度も讃えられていることがわかるであろう。

F2². **EVAM** という二文字の意味を詳しく説明する

G1¹. **EVAM** という二文字の了義を詳しく説明する

H1¹. 一切タントラの主要な真意は **EVAM** の意味であり、その了義はまた空と悲の2つであるならば、その2つの意味は何であるのか、を説明しなければならぬが、その [説明に] 2つあるその第一、楽空無差別という空と悲の意味を説明する

E は、文字と法源の三角形として在ることによって無我の真如(47a¹)を表わし、その時、三角形は三解脱門(trivimokṣamukha)をも表わすので、諸法の本性・因・果の3つは自性として成立したのものとしては空であるという空性と、無相 (animitta) と無願 (apraṇihita) という意味が **E** 字の表わす内容である。それ故に、空性の見を徹底して理解すること無くしては、**E** 字の意味は不完全なのである。[また] もしそれがあったとしても、内側外側の身体的重要部位に [**EVAM** を] 当てる [修習] から生じた大楽というものが無いならば、**VAM** 字の意味は不完全である。[そして] この2つがあったとしても、空性の見をこの請願の本質として起こすことと、空性を対象 (yul); 大楽を [その] 対象をもつもの (yul can) としてから、それ (大楽) によってそれ (空性) を顛倒なく確定するという楽空の結合を知らなければ、^{ビンドワ}滴の意味は不完全である。従って、楽空無差別の **EVAM** の意味を知ろうと欲するならば、これら [3つの] ことを知らなくてはいけないのである。

これらを3つ〔に分けて説明しよう〕。

II. 空の意味を説明する

J1. 輪廻の根本〔原因〕の確認

『行集灯』(CP.)によれば、

「そのように、有情は善知識と離れてしまうことによって、自分の心のあるがままを完全に知ることを考えずに、我に執着し、我所(47b¹)に執着し、〔執着を〕養い、〔業の〕積集を構想して〔その結果〕善、不善などを構想することによって、無始以来の輪廻から苦しみを受けるのである。¹³⁾」

と、〔このよのに〕心の真実を知ることができないという、真実執着(bden 'dzin)に迷うがために、人我と我所に執着することに依って、輪廻に流転するのである。〔このことは〕『八千頌〔般若〕』と『浄業障経』¹⁴⁾などの經典で証明されており、その意味を守護者ナーガールジュナ(Nāgārjuna)が明らかに〔なさって〕、

「もしもこの一切が空であり、不生を本性とするのであれば、どのように、楽・苦などがここに起こり、業によって輪廻するのであろうか。〔存在しないはずの〕我について〔存をと〕思い込んだ途端に、貧欲等の汚れによって構想されるので、〔一切は〕依他(gzhan gyi dbang)であり、故にこれらのすべては唯心、即ち幻の形象として生ずるのである。そして善・不善のその業によって善趣・悪趣へおもむいて、生を受ける。¹⁵⁾」と示してお説きになるのである。

守護者マハースッカ(Mahāsukha)の弟子であるアナンガヴァジュラ(Anaṅgavajra, Yan lag med pa'i rdo rje)もまた、

「それらから広大な生・死等が、辛苦を婢として、真実ならざるもの(mi bden)に執着する心をもつ者に生じる。智慧が足りない彼らは、実在に対する大きな因われがある限り、輪廻の牢獄に住む¹⁶⁾。」

(48a¹)と非真実を真実だと執着するその真実執着の力によって輪廻に

流転し、真実執着という実在への因われ流がある限り、輪廻から抜け出すことはできない、と仰言るのである。

このことは『宝行王正論』(RV.)より、

蘊についての執着がある限り、そこに我執がある。我執があれば、さらに〔それから〕業が〔生じ〕、それにより〔輪廻に〕生まれるのである。¹⁷⁾」

と蘊に対する真実執着が滅せられなければ、業煩惱(las nyan)の力によって〔輪廻に〕生まれることを転じえない、と仰言っていることと同じである。

J2. それ〔輪廻の根本〕を滅する無我の見を求める方法が〔中観と真言道において〕等しいことを示す

それ故に、輪廻の根本である真実執着の^く熏習をすっかり浄めるには、蘊を無自性であると了解する空性の理解が必要なばかりではなく、輪廻において、業煩惱の力による輪廻の束縛を断つにもまた、無自性を理解する智慧(shes rab)が無くしては不可能なので、輪廻の束縛を断った声聞・独覚たちも、この意味をまず修習したのである。これらのことは他で既に詳しく説明した。

従って『菩提心釈』(BV.)に、

「空性を知らない者達は、解脱の依所ではない。六趣の輪廻の牢獄に、これら愚者等は流転するであろう。¹⁸⁾」

と仰言り、またアナンガヴァジュラも、

「それ故に、三世間の人々を喜ば(48b¹)せようと思い、自らの迷乱を晴らそうと思う知ある者たちは、実在への執着を捨てる〔べきである〕。¹⁹⁾」

とお説きになる。そのように、顕教(mtshan nyid kyi theg pa)ばかりでなく、金剛乗に入る者も、輪廻の根本である実在への執着を捨てるには、無我の空性を了解する見についての理解を求めてから、その意味を修習すべきなのである。そのようにまた『金剛心莊嚴タントラ』(VHAT.)に、

「瑜伽をひとつひとつ知ってから、静かな場所へ行ってよく精進すれば、罪が浄まったとき、そこに正覚を完成する。法無我をよく修習することによって一切智に到達する。」²⁰⁾

とひとつの瑜伽を知った後に、静かな所で修習するならば、そのときの正覚の瑜伽は、法無我についての修習である、と説明する。これと同じ〔説明〕は〔他にも〕たいへん多いのである。

このように、真実執著を捨て、無我を理解する場合にも、〔まず〕我執によって把えられたままの対象 (yul) を〔論理的に〕批判・排斥した後 (sun phyung nas), 〔それが〕存在しない、と理解せねばならないのであって、真実執著の対象 (yul) に、心を散らさずに集中しただけでは不充分なのである。即ち、論理自在なる人 (Yuktiśvara, Rigs pa'i dbang phyug)²¹⁾ は、

「この対象 (yul) の排斥なくしてそれ (我執) を捨てることはできないのである。」

といい、アールヤデーヴァ (Āryadeva) も、

「対象 (yul) を無我と見るならば、輪廻の種字は滅するのであろう。」²²⁾

といい、

『入中論』(MA.) よりまた、

「あらゆる煩惱の過失 (49a¹) は有身見より生じたと知によって見た後に、我とはこの対象であると理解して、瑜伽行者は我を滅する。」²³⁾

というのである。

最初に無我の見を探求した上での理解を起こす方法は、真言〔道〕と中観の論書から説明されるものに違いは無い。即ち BV. は、

「秘密真言の門を通じて行を行ずる菩薩たちは、そのように願を本質とする世俗の相の菩提心を起こした後、勝義の菩提心を、修習の力によって起こすべきである。それ故にその自性を述べよう。」²⁴⁾

と仰言ってから、その後、他宗 (非仏教徒) の主張する人我と、自宗

(仏教) のうち、声聞部が主張する所取と能取が別体である真実と、瑜伽行派が主張する所取と能取が別体なものとしては空である真実なる心〔を考察し、このようにまず〕法無我を否定して、無我を確認するのである。²⁵⁾ なぜならば、秘密真言者が修習の力によって勝義の菩提心を起こす場合に、まず〔その〕前に無我の見を求める方法は、中観の論書にあるとおりにお説きになっているからである。〔これに関して〕声聞部である対象実在論者 (don srma sde) 二派 (有部・経量部) が、所取・能取を真実〔在〕と主張するのであり、声聞・独覚の (49b¹) すべての聖者達がそのようにお認めなるというわけではなく、これらの道に入った凡夫には〔この〕2つのあり方のいずれもある〔そのあり方を〕知るべきである。

J3. 〔無我の見を求める方法が中観と真言道において〕等しくないという主張を否定する

このことについてある人が自分の見解の主張をまとめて示したものと、

「蘊を考察した〔ならば空である〕その空性は芭蕉の如くに芯が無い (虚無である)。一切のあり方の最上である空性はそのようになることは²⁶⁾ ない。」

と仰言っているが、これによって、我執の対象 (yul) を妙観察の智慧 (so sor rtog pa'i shes rab) によって考察した後、確定した空性を修習するというのは真言の方法ではない、というならば、教証・理証によって正しく確認された無我の真意の意味を定めてから修習するのは無駄な修習だと主張するあなたは洞察力のあるお方である。この教証の真意は、第5章の大註釈『無垢光』(VP.) より、

「極味の集まりである我性という法を考察した〔ならば空であるその〕空は、断〔見の〕空を離れている。」²⁸⁾

と仰言っているように、中観派の証因 (rtags) の否定対象が宿るとこ

ろを正しく把握していないことにより、蘊等の諸々〔の事物〕を論理によって考察した場合、生滅等がどこにも成立しないことが無自性の意味である、と考えて理解してしまふ断〔見の〕空を否定するのであって、妙観察の智慧によるすべての考察を否定するのではないのである。もしそうではないならば、第2章の大註 VP. に、

「識 (rnam par shes pa) は勝義として存在することもまた、学者 (50a¹) 達は認めない。一他の自性を離れている (gcig dang du ma'i rang bzhin dang bral ba) 故に、空華の如くである。²⁹⁾」

と離一他〔性〕の証因と空華の喩えによって識蘊が無自性であると考察するときに、

「このことは中観派によって知られる。³⁰⁾」

と仰言っていることと、

「無我等が成立するのである。これはまとめて簡潔にお説きになったのであり、詳しくは広大な教証から知るべきである。³¹⁾」

とこの論書に無我を簡潔にお説きになるこのことは、中観等の論書から知るべきである、と仰言っていることと矛盾する。また、大註より、

「金剛は不変、不断なること偉大であり、まさにそれが乗物であるのが金剛乗である。そして真言の方法と波羅蜜の方法である果と因の本性がひとつに混じり合っているのである。³²⁾」

と因の乗である波羅蜜の空性の見解と、果の乗である真言乗の大楽の2つがひとつに混じり合っている、と仰言っているが故に、波羅蜜乗から確認された見解と、それを確認する方法が一致しないなどということが『時輪』(Kālacakratānta) の宗義に語られているというのは全く不合理なのである。そのように空性の見解を確認することは〔GST.の〕根本タントラ (Mūlatantra) の多くの章で〔も〕説かれているけれども、〔GST.〕第2章で毘盧遮那仏 (Vairocana) が〔菩提心偈として〕(50b¹)、

「一切事物を離れ、蘊界処、所取、能取を捨て、法無我と平等なるが故

に、自心は本不生にして空性を自性とするものである。³³⁾」

と菩提心をお説きになった〔この〕空というものを確認することが、〔ナーガールジュナの〕『菩提心釈』(BV.) によって成されたのである。それはまた、〔この〕第一句によって外道が想定する我を否定し、それから〔第二、三の〕2つ〔の句〕によって、二〔種の〕実在論者 (don smra) が想定する所取・能取が別体である真実を否定し、その後、残り〔の第四～六句〕によって唯心〔派〕の想定する真実なる心を否定した最後に、

「事物といわれるのは分別である。分別が無いことが空性である。分別が現われた所に、そのどこに空性があるろうか。分別されるもの分別するものという形象である心を如来たちはご覧にならない。分別されるもの、分別するものがあるところには菩提は存在しない。³⁴⁾」

とお説きになるときの分別とは、同書より、

「諸仏は、菩提心とは我と蘊等と識 (rnam rig) の諸分別に障げられず、常に空性を特徴とするとお認めになる。³⁵⁾」

と仰言る〔その〕人我と分別するなどの3つの分別についていわれたのである。〔GST.〕根本タントラ第15章に、

「一切法は (51a¹) 夢の如し。³⁶⁾」

とお説きになることの意味の解釈は、『自加持次第』³⁷⁾ で〔ナーガールジュナが〕お説きになられている。

妙観察の智慧 (so sor rtog pa'i shes rab) によって考察する方法もまた、根本タントラ第9章についての釈タントラ『密意解釈』(SVT.) に、「考察されなければ因より果が生ずるけれども、考察されるならば〔因果は〕どこにもとどまらないというあり方として理解される」とお説きになっており、³⁸⁾ VMT. 第16章からは、「三時 (過去・現在・未来) についても3つずつ、順次に分けてから考察する」と仰言っているのである。³⁹⁾ 同じ方面の (GST.に関する) 方便タントラである VHA. も、「諸有色 (形ある

もの)については極味に関する考察, 心については刹那を3つずつに分けた考察によって空性を確認する」と仰言っている⁴⁰⁾ので, 見の理解を求める方法は, 波羅密乗の通りに説明されるのである。GS.によっても,

「一多の性質に関して, この三界の事物は無自性と考察される⁴¹⁾。」

といい, また,

「輪廻の頂点の究極〔で〕, この三界のすべてを道によって考察すれば, 真実の蘊は存在しない。誰が考察し, そこで何について考察されるのか。努力によって, まさに真実が考察される限り, 一切は光明 ('od gsal) であり(云々)。」⁴²⁾ (51b¹)

と仰言っている。このことは, 最初に理解を求めるだけの段階ではなく, 後に修習をする段階で説かれているのである。しかしながら, 第四歓喜である俱生歓喜 (lhan skyes kyi dga' ba) と, 第四空である光明が現われてから, 楽空が結合するときに, 妙観察の智慧によって繰り返し考察することをここでいうのではなく, 三昧から立ち上がった後得の段階についてこのようにいうのである。〔また〕信解行によって観 (lhag mthong, vipaśyanā) を三昧において保持する場合に, 妙観察の智慧によって繰り返し考察して, 保持するのだ, と波羅密乗からお説きになっていることと, 今の2つは同じではない。

要約すれば, 諸々の大論書に見られる空の見解についての説に, 優劣の次第が4つある。即ち次の如く, 経量部が確定する人無我で, 中観帰謬論証派以外の大乗の宗義を説く人々もそれ(経量部)と一致して承認する〔空〕と, 瑜伽行派が承認する, 所取・能取が別体なものとして, また諸法に自らの本質とは区別されて仮設された自性として成立する遍計について, 空であるという空性と中観自立論証派の人達による, 言説 (tha snyad, vyavahāra) として自相として成立していることだけは否定できず, そうではない真実成立は否定される, という空性と, 中観帰謬派の人達による, 自相 (52a¹) として成立する対象 (don, artha) が二諦において否定され

るという無自性の見解, の4つである。このうち, 真言の無上〔瑜伽〕乗の所化の対象である宝石の如き〔秀れた〕人を主となさって, 楽空の結合についてお説きになった場合の空性の見解は, 第4番目〔の帰謬派の見解〕なのであり, 他の所化の対象の〔ための〕楽空結合の空に関して, 唯心派と自立論証派の両方の見解が, 所化の対象の力に応じてあるのである。このように, 無我の見について〔4つそれぞれが〕下, 中, 上, 上の上なのであり, 真言の諸論・註釈より, 唯心派の見を主として楽空結合について主張する方法は見られるけれども, 前に説明した人無我の見のみを主としてそのように〔楽空を〕結びつけるものは見られない。従って, 楽空結合の空について, 少なくとも唯識の学説の所取・能取が別体として空であるという空性だけについては, 決定を正しく得ておくべきであり, これらの設定はまた詳しく他で, 既に説明したのである⁴³⁾。

12. 楽の意味を説明する

それでは楽空結合のその楽とはどのようなものであるのか, というならば, これについて, 心を一点に集中する三昧のみを修習した結果, よく修練された心が生じたとき, その力で身体の諸々の風(氣息)が次から次へと流れ, 体内に利益をなすというあり方を具えたよく修練された身体が生じ (52b¹), それに依存して身体に楽が, 心には大歓喜が生じる, と『瑜伽行地』(Yogācārabhūmi)にお説きになるが, このことは内外双方(外道・仏教), 大乘・小乗双方, 顕密双方に共通であり, 心を無分別〔な状態〕に置くことを長く保つすべて〔の三昧〕に見られるのである。そしてこの方法は〔それを〕示す教証と共に, 『菩提道次第論』(Byang chub lam gyi rim pa)に既に説明した⁴⁴⁾。それ故, このような楽もまたこの〔楽空結合の〕楽ではないのである。

更にまた, 顕教に説明される風の源である呼気の修習と, 作タントラ⁴⁵⁾『禪定後次第分』, 行タントラ『大日経』に説かれている, 風が外に出るの

を妨げて内に留め、本尊瑜伽を修習する、というこの調息 (srog rtsol, prāṇāyāma) と説かれるものを修習することに依っても、心身に大楽が生ずる三昧は起こるけれども、内の身体の脈管の重要部位に当てる風の瑜伽ではないのであるから、その楽も無上〔瑜伽〕乗において楽空結合と説明されている楽ではないので、〔無上瑜伽乗の修習である〕風の金剛念誦や、瓶風の調息とは一致しないのである。尊師ブッダグフヤ (Buddhaguhya) は、風が外に出ることを妨げて内に保ち、本尊を修習するのは、瑜伽タントラにも合致する、と説明している。これら以外では (53a¹)、『般若心経⁴⁶⁾解説』において瓶風の修習について説明することと、下位のタントラ部 (無上瑜伽タントラを除くタントラ部) のある段階で、上位〔のタントラ〕の、身体の要所に当てる方法を幾つかのものが説明するのは、顕密と上下タントラの道の正しい区別を知らない、新説を勝手にでっちあげる人が為したことであるので、信頼に値しないのである。つまり、瑜伽タントラ以下の3つのタントラ部と顕教では、空性の意味を顛倒なく修習した〔結果の〕出世間の無漏の楽はたくさん説かれるけれども、身体の脈管の要所に当てることから風が中心に入る力によって体内の火 (gtum mo, caṇḍala) が燃え、菩提心が融ける〔ときの〕楽は説明されないので、楽空結合として説かれた楽の意味は〔それらには〕無いのである。

『要門の穂』AM.からも、

「然るに、初禅を得た人々も、転輪者たちのように楽に近づく、と説かれるならば、二つの無我性のいずれをも理解したときには言うまでもない。このように喜びが残ることから、初地は歓喜〔地〕と言われるのであるから、というならば、それは正しい。〔しかし〕これは俱生歓喜ではない。まさにそれ故に大楽ではなく、初心者段階で方便となるものでもない。即ち針の孔は (53b¹) 虚空の孔である、ということのみから、虚空とも等しくなるものではないから⁴⁷⁾」

と無我を全く理解しない初禅を得た〔だけ〕の者にも大きな楽が生じる、

と仰言っているならば、二無我を顛倒なく理解して長い間修習する般若波羅蜜乗の者に空性を修習した大楽が生じることは言うまでもない、初地を歓喜地というのもまた、この地において楽がよく留まるのでそのように名付けられたからであり、無上〔瑜伽〕乗は楽に関しては波羅蜜乗より特別に優れているのではない、と考える〔ことによる〕議論を否定した答えとして、空性を修習した上での大楽があるのは本当であるが、それは俱生の楽ではないので、無上〔瑜伽乗〕でお説きになられる大楽ではなく、波羅蜜乗における初心者段階では俱生の楽を実際に導く方便もお説きになっていないので、大楽に関して〔波羅蜜乗より〕優れていない〔という〕のではない、と〔AM.は〕仰言っているのである。

また同書より、

「然るに、般若波羅蜜において何であれ無上なるものは正等菩提の楽である、と仰言っている、というならば、そうは仰言っているが、その方便は示されていない。なぜならば方便となる俱生の大楽が示されないからである。その (54a¹) 故に、それ (俱生の大楽) はまた、この〔無上瑜伽の〕次第のみから理解されるべきである。⁴⁸⁾」

と波羅蜜乗では、果である菩提の楽の〔その〕方便である因の道なる俱生大楽が示されないので、果の段階では大楽を説き始めるけれども、2つの乗の違いは大きい、と仰言っているのである。GS. からも、

「それはまた、真実はタントラに住し、『吉祥秘密集會』(GST.)に明らかである。多くの戯論が広がるので、他では秘されて説かれたのである。作、行の各〔タントラ〕にも、経部の蔵等にも、最高歓喜だけはいろいろな形で在るが、有情の思惟の区別によって真実を努めてお隠しになって、宝石の〔如き〕蘊をもつ器のみに対して、守護者 (仏) は〔俱生歓喜を〕⁴⁹⁾ 設定された。」

と俱生歓喜のこの真実は下位のタントラ部と諸経 (スートラ) 部には示されておらず、秘密である、とお説きになっているのである。従って、最

高歓喜のみはそれらに多くの形で在る、と仰言っているのは、最高歓喜は真実に順次に導く〔ものである〕とお認めになり、同じではない多くの形でお説きになっている、という意味であって、真実（俱生歓喜）をこれらに説くというのではない。さもなければ、これらに上位の諸灌頂⁵⁰⁾も説かれるはずである。なぜならば、秘密等の（54b¹）灌頂を行なわずには大楽の真実を説くことは止められているからである。

このように俱生の楽という、他の乗と他のタントラ部とは共通ではない、優れた特別な教えについて説くというこのことは、無上〔瑜伽〕タントラとそのご真意の、正しい基準を具えたすべての註釈書に説明されるけれども、冗長となることを怖れて〔これ以上は〕述べない。

かくして空性を顛倒なく確定してから修習される無漏の楽であっても、俱生の楽ではないものがたくさんあるが、このことは、この方法に修練した者であれば、波羅蜜乗で粗雑な理解が生じた後に知る〔ことができる〕。また、それと似た〔楽〕が、非常に堅固な本尊瑜伽と結びついて起こるけれども、無上〔瑜伽〕の究竟次第の〔楽としては〕無意味であることは、下位のタントラ部の論に粗雑な理解が生じたとすれば知ることはできる。しかしながら智の能力が非常に弱い段階にある者が、前に説明した最初の楽のみを無上の楽空結合の大楽と思い込むこともたいへんもっともだと思われるのである。

このように楽空結合と説かれる楽とは俱生歓喜であり、それを初めに生じるのは、左右の脈の風を〔中央の脈である〕アヴァドゥーティー (ava-dhūti) に入れる力によって体内の火を灯し、それによって菩提心が融けることから生じるのだが、その楽と前に説明した諸々の楽は、単なる楽としては等しいけれども、意味は甚だ違いが大きいので、まちがえずに（55a¹）区別すべきである。これ（楽）についてこの乗では、無目的（dmigs med）の悲とも説かれている。即ちAM.より、

「方便とは衆生の利益をなす、目的の無い大悲であり、俱生の大楽の自

性である。⁵¹⁾」

と仰言っており、そのようにお説きになるものは〔他にも〕多いのである。

I3 楽空が無差別に結びつく仕方を説明する

J1¹. 本論

それでは無目的の悲である楽と空との2つが無差別に結びつく仕方はどのようなものであるのか、と考えるならば、これはST.より、

「無戯論の自性をもつものが智慧 (shes rab) と知られる。如意宝珠の如くに余すところなく有情を利益するのが悲に他ならない。無目的の住 (gnas) において、智慧と無目的の大悲に他ならない智 (blo) とが俱⁵²⁾に一体となる〔様〕は、虚空における虚空の如くである。」

と仰言っており、その意味を『般若方便決択成就』(PUVS.) からまた、「能知と所知に分けて瑜伽によって考察すれば、諸法は無自性であり、これが般若と真実といわれる。余すところなく苦の海を有する苦の因から生じた有情を愛著するので、悲は、貪愛 (d'od chags) といわれる、と知られる。⁵³⁾」

と色と心とを分けてから考察することによって（55b¹）無自性を確定するものを智慧（般若）、その方便から衆生の利益を生じる大きな愛著である俱生の楽を悲、と説明してから、

「水と牛乳が混じるように、無二のあり方という結びつきによって2つが集まったところのものが、智慧（般若）と方便と知られる。⁵⁴⁾」

と水と牛乳が混じる如くに結びつく、と仰言っている通りに、〔楽空は結合〕するのである。

これはまた、楽とそれ〔自身〕の法性（＝空性）が一体無差別であることについては、有法（＝楽）が成立するだけで、既に自身の空性と一体無差別として成立しているもので、それは無差別の瑜伽（結合）といわれるべき

ではないのである。同様に空性を理解する他のある智に、楽によって〔それとの〕一体化を当てはめること (rgyas 'debs pa) と、楽を生じた後に、〔その楽に〕空性の他のある見解によって〔それとの〕一体化を当てはめることでもない。なぜならばこれについて喩えば、布施等は無我の見によってとらえられても、布施等そのものがその見の本質として生じえない如く、空性の理解と楽との2つが互いにそれぞれの本質となっていないからである。

それではどのように〔結合〕するのか、と考えるならば、俱生の楽の本質として生じた対象を具えた (yul can) 知が、対象 (yul) である空性の真意を顛倒なく理解する、という対象と対象を具えたものとして結合することこそが、楽空が無差別に結びつくことなのである。それはまた、真義の俱生〔の楽が生じた〕ときに、対象と対象を具えたもの (知) の2つは、牛乳が水に入るが如くに一味と (56a¹) になって〔初めて〕正しい微細な二顯現 (gnyis snang) なのであり、真義の俱生〔の楽〕が生じないうちには、真実を直接には悟らないので、真実に対する信を作意によって起こす必要があるが故に、一味を信ずるのみなのである。

対象 (yul) である空性と〔楽とが〕無二に結びつく仕方は以上の如くであるので、空性を理解する智と楽との2つが本性無差別に結びつく仕方は、2つの智 (blo) が本性一体という同成同住 (grub sde = grub bde?, yogakṣema) 一なるものとして生じる〔という如く〕である。空性の理解を徹底する方法は、中観から起こるものより優れたものは無いので、この〔無上瑜伽〕乗と波羅密乗の2つは空性の見において優劣は無い。従って、因の真意はひとつであっても、確定する智において俱生の楽によって空性を確定するのと同じ力は、他の対象を見えたもの (知) による確定には無いので、空に違いは無くとも、方便なる楽によって〔無上瑜伽乗は波羅密乗と〕異なって優れている、とお説きになるのである。無我の空性の徹底理解が確定しなければ、輪廻から解脱できず、確定する俱生の楽が生じな

ければ、最上の真言道の心髓が無いので、各々ひとつだけでは不十分で、両方が必要だと仰言っている。即ち、サラハ (Saraha) は、

「悲と離れた空性に入っても、それによって最高の道を得ることはできない。然るに悲のみを修習した (56b¹) としても、この輪廻に住を免れることはできないであろう。2つを結びつけることができた人は、輪廻に住まず、涅槃⁵⁵⁾にも住まない。」

と仰言って、ドーハー (Dohā) より、俱生の智慧こそは道の精髓だと〔この後で〕説明するので、この場合の悲もまた俱生の楽なのである。前に説明した通りの俱生の楽が生じたときには、粗雑な諸々の分別を顛じて、心が不動に住することが自然に生じるので、いかなる対象にも〔心を〕散らさず、分別しない楽のみを修習することだけが空を修習する意味である、というならば、楽のみを修習しても輪廻から解脱できないと説明することは不合理になってしまうので、無我の意味を正しく確認した確定知を保たなければならないのである。

J2¹. 議論を〔決択して〕除く

もし俱生の楽によって無我の意味を確定した〔その〕確定知を保つことが空性の修習であるならば、ST. より、

「空が修習されるべきではない。非空が修習されるべきではない。瑜伽行者は空を捨てず、非空を捨てない。空と非空とをとらえることから少なからぬ分別が生じるであろう。〔空と非空を〕完全に捨てるならば〔また〕妄分別〔が生じる〕。それ故にその2つ (執著することと捨てること) を除く〔べきである〕。⁵⁶⁾」

と空と非空のいずれであっても、とらわれて修習するべきではない、と仰言ることと矛盾する、と言うならば、この教証の意味はAM. (57a¹) より次のように説明される。即ち、

「色等の諸〔物〕は勝義として存在するものとして空であることによっ

て常の辺を捨て、世俗として存在するものとして空ではないことによって断の辺を捨てるが故に、世俗として存在するものとして空、勝義として存在するものとして不空ととらえて修習することを否定し、色等は、勝義における無自性が世俗における色等の本質であるので、勝義として空、世俗として不空という本質を捨てることは不合理なのである。⁵⁷⁾

と説明するのである。従って、勝義において不空ととらえることと、言説において無という空にとられることから辺執の分別のすべてが生じ、勝義において空を捨てるならば、常の辺に陥る妄分別を、言説において不空を捨てるならば、業（行為）の果を断ってとらえるという妄分別を生じる、というのが〔この〕論の意味であって、あなた方が解釈するような〔意味〕ではない。なぜならば、この教証の前に同書（ST.）に、

「法界は平等性にして芭蕉の如くにとらえられる。⁵⁸⁾」

と精髓（＝自性）が無いととらえると仰言っているからであり、また同書（ST.）より、

「苦が余すところなく尽きることを願い、正等覚の最高の楽を得ようと望む者は、心を堅固にしてから努力によって考察し、その〔心の〕自性を無実在と（57b¹）〔理解〕すべきである。⁵⁹⁾」

と努力して考察し、それを無自性と確定することが、一切の苦が滅し、最高歓喜を得る因である、とお説きになっているからである。

また事物を真実と執著することが非空ととらえることであり、事物は非真実であるが、真実なる事物として空であるという空性を真実と執著することが空ととらえることの意味でもある。PUVS.より、

「迷乱を晴らそうと望む知識者は、事物への執著を捨てる。もし名のみは異なっても、分別であることに違いないが故に、賢者は事物への執著を完全に捨て、事物が無いとも考えないのである。燃える灯火を消すことはできるが、〔消えた灯火には〕何もできない如くに、実在（事物）への執著そのものは〔消すことが〕できるが、非実在への執著はそうではない。⁶⁰⁾」

と事物を真実と執著することについて、実在執著（dngos 'dzin）と名称を簡略にして述べたところのこれを捨てねばならない如く、それと、真実なる実在として空であるという空性を真実と執著することの2つは、名は同じではないが、内容は、真実執著の分別という点で違いはないので、それもまた捨てられねならない、と仰言っているのである。灯火等の意味は、事物を真実として執著することについて、それが真実として無い、と示されれば、〔誤った執著を〕転じ易いが、事物への真実執著を転ぜしめる事物が真実として空であるということについて、〔空性を〕真実〔在〕と（58a¹）とらえてしまうと、食物の不消化を治す薬が体内に到って消化されないのと同じように、転ずることのできない見解をもつものとして、中観の論にお説きになっていることと同義なのである。

これによって、BV.に、

「空性は不生、空性、無我といわれるものとしてある。劣った我性（bdag nyid dman pa）を修習する人はそれ（空性）を修習するのではない。⁶¹⁾」と仰言っているのもまた、不生、無我を真実と執著して修習することを否定していると知るべきである。即ち、『出世間讚』（LS.）に、

「一切の妄分別を晴らすために空性なる甘露をお示しになったならば、ある人がそれに執著した。その人をあなたは強く斥責した。⁶²⁾」

と仰言る如くである。

従って、このような論理はまた、仏のお言葉と〔その〕ご真意の註釈にたくさん説かれ、更に空性と無我と不生等に関して修習することについてもたくさん説かれているのだが、これらの〔諸説〕は矛盾しないというあり方をこのように知るべきであり、輪廻の根本を断つ無我の確定を導くことを中断するべきではないのである。このようなこの〔無我の〕確定は、凡夫のときには微細な分別をも離れた離分別ではないけれども、無分別智と非常によく一致するので、それを修習したことに基づいて無分別が生じるのだ、と GST の註釈である『供華』（KGN.）、（58b¹）AM. と『我

成就入』より明らかにお説きになり、他で既にたくさん説明もしているの
で、冗長になるのを怖れて〔これ以上は〕記述しない。

要約すれば、輪廻と涅槃のいずれの法に対しても、真実と執著するとい
う名称への執著⁶⁴⁾の対象 (dmigs) に向かって、〔それが〕微塵も無いと確
定し、かつその真の意味 (don) においてはまた、因果の縁起の所作・能
作のすべてが最もよく理にかなっていると見る、という二辺を離れた真意
について、量の力によって確定を得たところの空性の理解に関しては、少
なくとも〔常住ではない等の〕現実に基づいた疑い (don 'gyur gyi the
tshom) を起こすことによっても、輪廻の生を惨めなもの〔見〕なすな
ど、無辺の功德が經典とその註釈から一度ならず説かれている上に、無上
金剛乗からは、かくの如きそれ (空性) を対象を具えた (yul can) すぐ
れた俱生歓喜によって正しく確定し、対象を具えた (yul can) 大樂を通
じて、まさにこの一生のうちに最上のものが与えられる等の段階〔につ
いて〕と、究竟の無量の功德なるもの〔について〕説明されるので、考察
力のある人は、無我の意味を徹底して理解して確定する見と、〔無上瑜伽
タントラ〕独特の大樂を導く方便という、辺を断った奥義に入って、楽空
が無差別に結合する俱生の智慧を求めることに努力すべきである。

(59a¹) GST. の統タントラ (Uttaratantra=18章) より、根本タント
ラにおいて菩提心と説かれているものの意味を質問したとき、空と悲とが
無差別なることが菩提心⁶⁵⁾である、と仰言っており、〔GST.〕根本タントラ
(Mūlatantra) 12章における菩提心についての諸説に関して、『灯明』
(PU.) で、光明 ('od gsal) と双入 (zung 'jug) 2つの菩提心をお説き
になるうちの前者は、真義 (don) の俱生であるので、楽空無差別の空と
悲との菩提心は、GST. の学説の中に説明されていないのではないのであ
る。『五次第』(PK.) から、

「大牟尼のお説きになった八万四千の法門のうち、現前菩提の特質は精
髓中の精髓であると説かれている。」⁶⁶⁾

と真義の光明である現前菩提は精髓中の精髓であると説かれているのも、
真義の俱生なる楽空無差別の菩提心である。

無上〔瑜伽〕タントラとそこご真意を註釈した、量 (tshad) を具えた
諸論のあるものには楽の方面は明らかで、かつこの空性理解の方法のみに
ついては明らかではない。またあるものには空性理解の方法は明らかで、
この楽の方面のみについて明らかではない。しかしそれら〔の論〕におい
ても楽と空両方の結合を真意ととらえているのであって、それぞれについ
て誤るべきではないのである。

楽空無差別という語は風の如くによく知られているが、(59b¹) 諸々の
楽の違いを区別した上での大樂と、諸空の違いと区別した上での空の究竟
と〔その2つの〕結びつき方を知ることはたいへん稀である、ということ
をご意図してサラハ (Saraha) は、

「あの家この家でその語が語られていても、大樂の住はあまねく知られ
ることはない。」⁶⁷⁾

と仰言っている。従って、わずかばかりのことで簡単に満足すべきでは
なく、秘密中の最も秘密なるこの真意を理解することに長い時間をかけ
て努力すべきである。

Abbreviations & Bibliography

- AM. = Abhayākara Gupta, *Śrisamputatantrarājaṭīkā-āmnāyamañjarī*, P.
No. 2328, Vol. 55
CP. = Āryadeva, *Caryāmelāpakapradīpa*, P. No. 2668, Vol. 61
CS. = Āryadeva, *Catuḥśataka*
Bhattacharya, V., *THE CATUḤŚATAKA*, Viśva-Bharati Series
No. 2, Calcutta, 1931
Dohā. = Saraha, *Dohākoṣagīti*, P. No. 3069, Vol. 68
奈良康明「サラハバーダ作ドーハーコーシャ (I), (II)」, 『駒沢大学仏教
学部研究紀要』24, 25, S. 41, 42
GS. = Padmavajra, *Sakalatāntrasambhavasamcodanī-śrīguhyasiddhi*, P.
No. 3061, Vol. 68
Manuscript (A Collection of Buddhist Tantras by different authors,

- Oriental Institute, Baroda, No.13124), 成田山仏教研究所蔵
 GST. = *Guhyasamājantra* ed. by Yukei Matsunaga, Tokyo, 1978
 KCT. = *Kālacakratāntra*, P.No.4, Vol.1
 Banerjee, B.(ed.), *ŚRĪ KĀLACAKRATĀNTRA-RĀJA*, Bibliotheca Indica, Calcutta, 1985
 KGN. = Ratnākaraśānti, *Kusumañjali-guhyasamājanibandha*, P.No. 2714, Vol. 64
 LS. = Nāgārjuna *Lokātīstava*, P.No.2012, Vol. 46
 MA. = Candrakīrti, *Madhyamakāvatāra*
 MV. = Nāgārjuna, *Mahāyānaviśīkā*
 Tucci, G., *Minor Buddhist Texts*, Part I, Serie Orientale Roma, Roma, 1956
 PK. = Nāgārjuna, *Pañcakrama*
 de la Vallee Poussin, L., *Pañcakrama*, Études et Textes Tantriques, Gand, 1896
 PUVS. = Anaṅgavajra, *Prajñopāyaviñścayasiddhi*, P. No. 3062, Vol. 68,
 高橋尚夫「Prajñopāyaviñścayasiddhi」(一), (二), 『豊山学報』25, 26&27,
 S.55, 57, Bhattacharyya, B., *TWO VAJRAYĀNAWORKS*, G.O.
 S.No.XLIV, Baroda, 1929, Manuscript(A Collection of Buddhist
 Tantras by different authors, Baroda, No. 13124) 成田山仏教研究所蔵
 RV. = Nāgārjuna, *Ratnāvalī*
 Hahn, M., *NĀGĀRJUNA'S RATNĀVALĪ*, INDICA ET TIBETICA Bonn, 1982
 ST. = *Samputatantra*, P.No.26, Vol. 2
 SVT. = *Samdhiviyākaranatantra*, P.N.83, Vol. 3
 VHAT. = *Vajrahṛdayālamkāranatantra*, P.No.86, Vol. 3
 VMT. = *Vajramālātantra*, P.No.82, Vol. 3
 VP. = *Vimalaprabhā*, P.No.2064, Vol. 46
 Upadhyaya, J., *VIMALAPRABHĀ*[Vol.1], Bibliotheca Indo-Tibetica Series No.XI, Varanasi, 1986

Notes

- 1) VMT.I 170b⁸.
- 2) evaṃ mayā śrutam/ekasmin samye bhagavān sarvatathāgata-kāvayāvkittahṛdayavajrayośidbhageṣu vijahāra/という GST.の導入の言葉を40の文字に分解し、それぞれに一偈を作って、生起次第と究竟次第を説明する。

- VMT.LIX, PU. に見られ、聖者流の修道を簡潔に示したものである。
 Cf. Wayman, *Yoga of the Guhyasamājantra*, New Delhi, 1977.
- 3) この要約は、VMT. LVIII, PU.の内容に従っていると思われる。Cf. *ibid.*, pp. 182—183.
 - 4) VMT.LVIII 224b⁴⁻⁵.
 - 5) VMT.LVIII 224b⁵.
 「無二の標識」(gnyis su med pa'i mtshan byed)はVMT.では、gnyis su med pa'i bde mchog となっている。
 - 6) VMT.LVIII 224b¹⁻².
 - 7) VMT.LVIII 224⁶⁻⁷.
 - 8) GS.II 7b⁶⁻⁸.
 <MS.Baroda 7a³⁻⁵>
 sārāt sāratarāṃ proktaṃ tantrāḍau yad vyavasthitāṃ yat mahā-sukhanāthena guhyatattvam udāhṛtam // buddhānām bodhisattavānām sarvasatvasukhodayaṃ // guhyakalpaikarājasya ^(a)śrisamājasya samsthitam // evam ity akṣaraṃ śuddham traidhātukanamaskṛtam // ^(m)
 - 9) GS.II 9a³⁻⁴.
 <MS.Baroda 9a¹⁻²>
 drśyate taṃ khadhātvākhyam samantāt tilasimbivet // gāṅga (na?) ^(a)
 divālikāsamkhyaiḥ paripūṇṇa(m) tathāgatāiḥ // tasyaivākṣaratatvasya sevām kṛtvā upāyataḥ // buddhās ca bodhisattvās ca prāpnoti ^(uvanti)
^(ā)
 padanuttaram //
 - 10) GS.II 9a⁶⁻⁷.
 <MS.Baroda 9a⁵>
 na cātraradvayāsyātra tantrāḍau luptam iṣyate // ^(kṣa) ^(a)
 - 11) VMT.LVIII 224b²⁻³.
 - 12) ST.285b⁶.
 - 13) CP.V 93b⁵⁻⁶.
 - 14) *Ārya-karmavarāṇa-viśuddhi-nāma-mahāyānasūtra*, P.No.884(Vol. 35).ここでツォンカパが『八千頌般若』、『浄業障経』を挙げるのは、CP.に従っている(Cf. 13)).CP.によれば、『八千頌般若』22章(善知識の章)、『浄業障経』で、我と我所への執着により、有情に汚れと清淨があることを示す。CP.はあわせて『如来藏経』と次のナーゲルジュナの言葉を引く。
 - 15) 後半部分“di dag thams cad sems tsam ste sgyu ma' i rnam par yang dag 'byung/de nas dge dang mi dge'i las/des ni bde 'gro ngan gror skye/'は『大乘二十論』18偈に相当する。

<MV.18>

cittamātram idaṃ sarvaṃ māyākāravat utthitam/
tataḥ śubhāśubhaṃ karma tato janma śubhāśubham//

16) PUVS.I—5, 6 (P.No.3062, 31b³⁻⁴)

Skt. 原文と Tib. 訳とはかなり相違する。

高橋p.185 (Bhattacharya, B., p.3)

tābhyaṃ ca maraṇotpādaprabhṛtyatyantavistaram/
ajasraṃ jāyate duḥkham asatyāsaktacetāsām// 5

yāvad bhāvamahāgrāho bhavacārakavartinām/
prajñāhīnatayā tāvat svahitaṃ parahitaṃ na ca// 6

(訳) その2つ(煩惱と業)より、死と生をはじめとする極めて広大な永続的な苦しみ、非真実に執着する人々に生じる。智慧が劣っているが故に、実在への大きな囚われが有る限り、生存の牢獄にある人々には、自利も利他もない。

17) RV.I—35 (Hahn, pp. 14—15).

skandhagrāho yāvad asti tāvad evāham ity api/
ahaṃkāre sati punaḥ karma janma tataḥ punaḥ //

18) BV.72 (Lindtner, p. 206).

19) PUVS.I—7 (P.No.3062, 31b⁴⁻⁵)

高橋p.186 (Bhattacharya, B., p.4, MS.Baroda 71a²)

atas trijagadānandam kartukāmais svavibhramam/
hartukāmais ca samtyājyo bhāvagrāho maṇiṣibhiḥ//

20) VHAT. 319b⁴⁻⁵.

21) いかなる人物か不明。

22) CS. XIV—25cd (Bhattacharya, V., p.230)

dr̥ṣṭe viṣayanairātmye bhavabijaṃ nirudhyate //

23) MA. VI—120.

24) BV. (Introduction), Lindtner, p.184.

25) Cf. 生井衛「菩提心偈に関する一考察」、『密教文化』91, S.45, 吉水千鶴子「Nagarjuna 作 Bodhicittavivarana について」、『印仏研』36—2, 1988.

26) 出典不明。

27) 皮肉であると思われる。

28) VP.V 211a¹.

29) VP.II 224a¹⁻², Upadhyaya, p. 267, 11.24—25.

ato mādhyamika āha
neṣṭam tadapi dhīrāṇāṃ vijñānaṃ parāmārthasat/
ekānekasvabhāvena viyogād gaganābjavat //
na san nāsan na sadasan na cāpy anubhayātmakam /

catuṣkoṭivinirmuktaṃ tattvaṃ mādhyamika viduḥ // iti

30) VP. II 224a³, Upadhyaya, p.267, 1.27 (Cf.29).

31) VP. II 221a¹⁻², Upadhyaya, p.265, 11.27—28.

nairātmyādisiddhaḥ saṃkṣepeṇātroktā, vistaro vistarāgamena jñeya
iti niyamaḥ /

Cf. KCT. II—172, 173.

32) VP.中と思われるが不明。

33) GST.II, 松長 p.10.

sarvabhāvavigataṃ skandhadhātvyatanagrāhyagrāhakavarjitam /
dharmanairātmyasamatayā svacittam ādyanutpannaṃ śūnyatābhāvam /

34) BV.44, 45, Lindtner, p.198.

35) BV.2, Lindtner, p.186.

36) GST.XV に svapnopameṣu dharmeṣu anutpādasvabhāviṣu /sva-
bhāvasuddhatattveṣu bhrāntivajraḥ pragīyate // (XV—121, 松長 p.82)
と説き、また evam eva bhagavantaḥ sarvatathāgatāḥ sarvadharmāḥ
svapnāḥ svapnasamayāsambhūtāś cānugantavyāḥ / (松長p.83) とも説く。

37) 『五次第』(Pañcakrama) の第二次第自加持次第(Svādhiṣṭhānakrama)。

38) SVT. 267b—268a.

39) VMT. XVI 186b⁶.

40) VHAT. VI に心のついての考察に言及するが、一致しない。

41) GS.III 10b³.

Skt.原文と Tib.訳とは一致しない。

<MS.Baroda> 11a²

bhāvasvabhāvaṃ vidhivad vivekta(m) //

traidhātuke ekam anekarūpam //

(訳)三界において多くの在り方をもつ唯一なる存在の本性が、決まりどうりに識別された。

42) GS.IV 17a⁴⁻⁵, Skt. (MS.Baroda) 欠。

43) *Legs bshad snying po* などの顕教の著作を指すのであろう。

44) *Śamatha* 章を指すと思われる。

45) *bSam gtan gyi phyi ma rim par phyeb ba* (*Dhyānottarapatala-
krama*), P.No.430, Vol.9.

46) *Shes rab snying po'i rnam par bshad pa* (P.No.5222)?.

47) AM.38a²⁻⁴.

48) AM.38a⁴⁻⁵.

49) GS.I 4a⁵⁻⁷.

<MS.Baroda> 2b³⁻⁶.

tac ca tatvaṃ sthitan trantre śrīsamāje parisphuṭam //
 guptam anyatra nirdiṣṭam^x prapañcānekavistaraiḥ //
 kriyācaryādibhedena sūtrāntaṭṭakādibhiḥ //
 ekam eva paraśuddhaṃ naikākāraṃ vyavasthitam //
 sthāpitam bhūtanāthena tatvaṃ saṃgopya yatnataḥ //
 satvāśayānubhedena skandaratanakaraṇḍake //

50) 第二秘密灌頂, 第三般若智慧灌頂, 第四灌頂の三つ。

51) AM.10b⁴.

52) ST.257b³⁻⁴.

53) PUVS.I—14, 15 (P.No.3062, 32a¹⁻²).

高橋 p.184 (Bhattacharya, B., pp.4—5, MS.Baroda 71a⁷—71b²)
 parāmarśanayogena dharmānām niḥsvabhāvatā /
 jñānajñeyavibhāgena prajñātattvaṃ tad ucyate // 14
 rañjaty aśeṣaduḥkhaughān utthāms tu duḥkhahetutaḥ /
 sarvasattvān yatas tasmāt kṛpā rāgaḥ pragiyate // 15

54) PUVS. 1—17 (P.No.3062, 32a³).

高橋 p.184 (Bhattacharya, B., p.5, MS.Baroda 71a²⁻³)
 ubhayor melanaṃ yac ca salilakṣirayor iva /
 advayākārayogena prajñopāyaṃ tad ucyate // 17

55) Dohā.75b²⁻³ (奈良 I, v.17, 17', p.24).

56) ST.257a⁸. これは PUVS.IV—5, 6 と酷似する。

高橋(2)p.163 (Bhattacharya, B., p.16, MS.Baroda 76b⁶—77a¹)
 na śūnyabhāvanām kuryān nāpi cāśūnyabhāvanām /
 na śūnyam saṃtyajed yogi na cāśūnyam parityajet // 5
 aśūnyaśūnyayor grāhe jāyate 'nalpakalpanā /
 parityāge ca saṅkalpas tasmād etad dvayaṃ tyajet // 6

57) AM. 83a⁷—b²

58) ST. 257a⁷.

59) ST.258a⁸.

60) PUVS. I—7cd, 8, 9 (P.No.3062, 31b⁴⁻⁵).

高橋 pp.184—186 (Bhattacharya, B., p.4, MS.Baroda 71a²⁻⁴)
 hartukāmaś ca saṃtyājo bhāvagrāho mañiṣibhiḥ // 7
 bhāvagrāhaṃ parityajya nābhāvaṃ kalpayed budhaḥ /
 yadi nāmānayor bhedaḥ kalpanā naiva bhidyate // 8
 varam hi bhāvasaṅkalpo na tv abhāvaprakalpanā /
 nirvāti jvalito dīpo nirvṛtāḥ kām gatiṃ vrajet // 9

61) BV.49, Lindtner, p.200.

62) LS.80a⁵⁻⁶.

63) Jñānapāda, *Ātmasādhanaṅvātāra* (P.No.2723) のことか？

64) mchan 'dzin とあるが, 北京版に従って mtshan 'dzin (47a⁵) と読む。

65) GST.XVIII—10ab, 38cd, 39ab, 松長 pp.113, 116.

bodhicitteti kiṃ jñeyam vidyāpuruṣeti kiṃ tathā / 10ab
 śūnyatākaruṇābhinnam bodhicittam iti smṛtam // 38cd
 kāyavākcittavajreṇa bhedyābhedyasvabhāvataḥ / 39ab

66) PK. II—76.

caturaśītisāhasre dharmaskandhe mahāmuneḥ /
 sārāt sāratarāṃ proktam abhisambodhi lakṣaṇam //

67) Dohā. 79b⁶, 奈良 II, v.128ab, p.44.

Tib. 訳 (北京版) では以下のごとくである。

khrim dang khrim na de ni brjod min te //
 bde chen gnas na yongs su shes pa min //

October, 1988

(文部省科学研究費による成果の一部)

*この訳の内容の検討は, 拙稿「ツォンカベの無上瑜伽タントラ解釈」(日本
 西藏学会会報第35号掲載予定)において行なったので, 参照していただければ幸いである。